

2018年度JICA課題別研修

「食料および農業のための植物遺伝資源の保全および利用」研修員の受入

9月10日～9月28日にかけて、キューバ農水省遺伝資源専門員のYadira Martinez Pérezさんが標記プログラムの研修員として私たちの研究センターへ来られました。当研究センターでは、アジアやアフリカからの留学生や研修生が多く、中南米出身の方とふれ合うのは初めての経験でした。英語のみでなく、時には辞書を片手にスペイン語を交えながら研修を進めることで、専門的な研修内容も徐々に簡潔に伝えることができるようになりました。研修中は、密なスケジュールの中、次から次へと入ってくる新しい情報を熱心にメモや写真に残す彼女の姿が印象的で、遺伝資源に関する専門的な研究手法からキューバの農業事情まで、一緒に考え学ぶ貴重な経験ができました。

(長谷川友美)



研修員のジャディラさん(左端)を囲んで

アフリカのイネ生産性向上に向けた国際共同研究に関する セミナーを開催

農国センターは、9月3日(月)、農学部第3講義室において、2018年度第1回オープンセミナー「アフリカの食糧問題解決に向けたイネ研究国際展開～ケニアにおける研究拠点の形成と活用～」を開催しました。農国センターは、学内外の研究機関と連携し、ケニアを拠点にアフリカのイネ生産性向上に向けた国際共同研究に取り組んでいます。今回のセミナーでは、これまでの活動成果を報告するとともに今後の計画を紹介し、基礎研究の成果に基づくアフリカへの応用展開の展望について意見交換することを目的としました。最初に行われた榎原大悟准教授による講演では、イネの栽培と育種に関する共同研究を通してケニアに研究拠点を構築したこと、国際稲研究所(IRRI)などとの連携によりアフリカにおける国際協働のためのネットワーク構築を進めていること、アフリカの穀物生産に多大な被害をもたらしている寄生植物「ストライガ」の防除技術の現地実証試験を名古屋大学トランスフォーマティブ生命分子研究所(ITbM)と共同で実施する計画を進めていることなどが報告されました。続いて、生物機能開発利用研究センターの芦荻基行教授が、イネ遺伝子研究の成果に基づき品種改良を行い、世界に配布するWISHプロジェクトについて講演を行いました。さらに、大学院生命農学研究科の榎原均教授により、理化学研究所と連携して取り組む「理研-名古屋科学技術ハブ(仮称)」の説明が行われました。「理研-名古屋科学技術ハブ(仮称)」においては、名大-理研の共同研究およびWISHプロジェクトによって開発された有用遺伝子を持つイネ系統のケニアの環境下における生育収量反応の調査が行われています。講演に引き続き行われた総合討論においては、アフリカにおける研究成果の応用展開のあり方や現地で求められる技術などについて活発な議論が行われました。(榎原大悟)



第1回オープンセミナーで講演する榎原准教授